

アジア競技大会を広島に

アジア競技大会は、インドの故ネーデル首相の提唱により、昭和23（1948）年7月のロンドンオリンピックに参加していたアジア6カ国（インド、フィリピン、朝鮮、中華民国、セイロン、ビルマ）の代表が、競技大会を4年ごとに開催することで一致し、翌年ニューデリーの会合で、アジア競技連盟が創立されて始まった国際的なスポーツ大会である。第1回アジア競技大会が昭和26（1951）年3月インドのニューデリーで行われたのを始まりとして、以後オリンピック大会の中間年に開催されており、昭和33（1958）年5月には、第3回大会が、昭和39（1964）年の東京オリンピック招致活動中の東京で開催されている。

アジア競技大会の広島招致は、昭和53（1978）年広島市体育協会会長が、当時の荒木広島市長に国際的スポーツ大会の招致を要請した時から始まる。

昭和57（1982）年に、広島市から県内市町に対して広島大会構想策定作業の一環として、大会での利用可能な体育施設についての調査依頼があった。

各競技の候補会場はまず、競技場および選手控室などの整備状況と、駐車場、道路、交通条件、および不

足施設を整備するための空き地の有無など施設周辺の状況調査が行われた。次に、各競技の競技場規格、練習場や競技関連施設の規模、運営関連施設の規模、駐車場の駐車台数に条件に選考された。

第三次選考まで残った大竹市総合体育館は、選手、役員控室などが現状の施設ではば対応可能として、昭和58（1983）年3月25日にバスケットボール予選会場に決定された。

昭和59（1984）年2月、「昭和65年第11回アジア競技大会の広島招致」について閣議決定が行われ、日本オリンピック委員会の決定を受け、広島市は正式に開催地として名乗りを上げる。ところが、同大会については中華人民共和国の北京市も開催を希望し、広島市と競合することになったのである。どちらも譲らず、

市制施行70周年連載企画

振り返る
70年

問い合わせ
企画財政課 ☎59-2124

アジアオリンピック評議会（OCA）はなかなか正式決定できなかった。

第12回大会が広島に決定

そして、昭和59（1984）年9月、アジア競技大会招致をめぐる両市の競合は、大韓民国のソウルで開催されたアジアオリンピック評議会（OCA）総会に舞台を移した。北京市は中華人民共和国の首都であり、第1回目のニューデリーから第10回のソウルまで、どの大会も首都での開催であった。しかも中華人民共和国での開催は初めてである。一方、地方都市ながら、廃墟からの復興と国際平和の拠点を目指す広島市の姿勢をOCAは高く評価しており、どちらで開催するかなかなか決められなかった。そうした中、仲裁に入ったOCA会長から前代未聞の案が提案される。それが「2大会の開催場所をセットで開催決定」だった。この案が採用されたことによって、北京が昭和65（1990）年の第11回大会、広島が昭和69（1994）年第12回大会開催と決定されたのである。2大会決定は過去に例をみない英断であり、また地方都市開催はアジア競技大会初であった。

この決定から2年後となる昭和61（1986）年、広島市アジア競技大会対策室から「昭和58年ごろ、大竹市がバスケットボール会場という

話もあったが、会場についてはいったん白紙に戻した。今後は組織委員会が設置され、会場について改めて検討される。会場誘致は、早く名乗りを上げた方が有利になるので、会場誘致の希望があれば、「アジア競技大会会場開催要望書」を提出してほしい」と言ってきた。

市は、大会開催が予定されている昭和69（1994）年が市制施行40周年に当たることから、会場を総合体育館とし、以前検討された卓球、バドミントン、バスケットボール、柔道、ボクシング、バレーボールのいずれか1競技の開催誘致を要望した。そして昭和62（1987）年4月1日、財団法人広島アジア競技大会組織委員会（通称HAGOC）が発足、平成元（1989）年4月6日、バスケットボールの予選会場として、大竹市総合体育館が正式決定された。

予選会場とされたのは、総合体育館の入場観客数が1100人程度であり、3000人以上を予定している決勝戦を行うには不足することが理由であった。

全市挙げて大会推進

平成3（1991）年6月22日には、「広島アジア競技大会大竹市推進協議会」（会長…大竹商工会議所陣場寛会頭）を発足させた。市の歴

史上初の国際大会の開催に向け、全市挙げての推進体制を整えたのである。平成4（1992）年から平成5（1993）年にかけて、大会への機運の醸成を図るために、大竹駅前、市役所前、国道2号沿い、総合市民会館、広島岩国道路大竹IC、玖波駅前などに広告塔を設置し、市内の公園へバスケットボールゴールポストを設置するなど、PRに努めていった。

平成3（1991）年、本格的なリハーサル大会として「第25回日本リーグ大竹大会」を誘致し、平成3（1991）年11月24日に総合体育館で実施した。後日「選手控室とした体育館南側の指導員室は狭く、またアリーナフロアの傷みもかなりひどいため、張り替えまたは研磨が必要」などの要望がHAGOCから大竹市に出された。

体育館では昭和55（1980）年の開館以来、毎年11月開催の産業祭に利用されており、体育館の通常利用は「土足厳禁」だが、年に1回の産業祭では薄いゴムシートを1枚敷き詰めただけで土足のまま会場への出入りを認めていた。フロアの傷の大半は、土足のまま利用したため、一点に圧力のかかる女性のピンヒールによってできたへこみや靴に付着した小さな砂などによってできた傷であった。

第10回 大竹がバスケットで沸いた 広島アジア競技大会



総合市民会館
のメモリアル
モニUMENT。

平成6年、広島で開催されたアジア競技大会。市を挙げて取り組んだ世界規模の大会が大竹市を舞台に行われました。

平成4（1992）年、体育館の東側の倉庫部分を改築して控室4室を新たに増設、アリーナの研磨工事、館内トイレの洋式化、アリーナ照明設備のレベルアップ（700ルクスを1500ルクス程度に）などをおよそ2億円かけて実施、ハード面の整備を終えた。



日本対中国の熱戦に沸く総合体育館。



大会マスコットキャラクターのポッポとクックは、盛り上げにひと役買いました。

熱戦が繰り広げられた広島大会

大会は、平成6（1994）年10月3日から15日の12日間（10月11日は休息日）にわたって行われ、大竹会場では、10月3日から10日までの8日間の予選リーグが行なわれた。10月13日には広島経済大学石田記念体育館で女子決勝が行われ、77対76の1点差で大韓民国が金メダルに輝き、日本は惜しくも銀メダルに終

わった。また、男子決勝は10月15日に同体育館で行われ、100対72で中華人民共和国が大韓民国を破って金メダルに輝いた。日本男子は、準決勝で大韓民国と対戦、101対63で敗れたが、フィリピンの3位決定戦で、わずか3点差で勝利し銅メダルを獲得している。

「第12回アジア競技大会広島1994」は、旧ソ連の中央アジア地域の国々からの参加や、内戦の影響で国際スポーツ大会から遠ざかっていたカンボジアの参加が認められた大会で、42の国と地域から6826人の選手・役員が参加し、34競技・337種目に熱戦を繰り広げた大会だった。大会期間中の観客は、組織委員会が目標とした110万人を超え、111万8591人にのぼった。（総合体育館における観客数は延べ6048人）

大会終了後、広島開催の意義と県民、市民挙げての協力、支援により大会が成功のうちに終わったことを後世に伝えるとともに、今後のスポーツ振興やボランティア意識の向上に資するため、HAGOCは、競技の行われた各会場（施設）に、アジア競技大会メモリアルモニUMENTを設置した。このモニUMENTは20年の時を経た今でも、総合市民会館の正面玄関に向かって左側のスロープの前にたたずんでいる。